

大森貝塚とモースの食人説

日本ではじめて科学的・近代的な体裁をとった大森貝塚の発掘報告書は、欧文・和文の両方で刊行され、出土した土器や骨・貝などの遺物が図版を添えて客観的な文章と数値で記述された。デンマークの貝塚調査で原始時代の日常生活について多くの事実が明らかになるなど、貝塚研究の重要性を認識していたモースは、遺物が豊富な大森貝塚では、様々な形態・装飾の土器をはじめ、角器、骨器、貝器、石器や各種の動物遺体など、出土した多くの遺物を余すことなく図示するのが望ましいと考えたのである。しかし、大森貝塚における最も重要な発見だとモースが考えたのは、疑問の余地ない食人風習の事実であった。

モースの観察によれば、大森貝塚から出土した人骨は、イノシシ、シカその他の獣骨と混在した状態で見出され、しかも、獣骨と同様にすべてばらばらに割れていた。引つ掻いたり切り込んだ傷が著しい骨もあり、それらの骨が埋葬されたという根拠は見つからなかった。したがって、人骨が割れているのは、獣骨の場合と同じく、随を取るか、煮るのに便利なためであり、すなわち、貝塚を残した人々に食人の風習があった証拠にほかならない。

大森貝塚でこの結論を導くにあたって、モースが比較を行ったのは、フロリダのセントジョン貝塚の調査報告である。ワイマン教授によるこの貝塚の調査では、まさにモースが大森貝塚で見出したのと全く同様の事実関係に基づいて、食人の風習があったことを先んじて結論づけていた。というよりも、鳥居龍蔵が早くに指摘したように、モース自身、ワイマン教授のもとでフロリダの貝塚調査に何度も参加した経験があり、ワイマン教授の報告書が『大森貝塚』の手本なのであった。

ただし、モースにとって、フロリダの貝塚と大森貝塚には大きな違いがあった。すなわち、ニューイングランドやフロリダの貝塚における食人風習は、当然予期されるものであったが、それは、「北米インディアンの多くの種族は、人肉を食べたという記録があり、また南北両アメリカには、この風習をこの種族が現存する」からであった。「白人が最初に出会ったとき野蛮人たちは、彼らの祖先たちの暮らしとまったく同じ条件の中で生活しており、今日なお世界の何カ所かに残っている真正の石器時代野蛮人とまるで同様」だったと言うのである。これに対して、日本における食人風習の証拠は異なる意味を持っていた。というのは、モースによると、歴史家が1,500年ないしは2,000年前まで歴史の詳細を驚くほどの忠実さで記録している日本では、こうした奇異な風習の形跡が窺えず、また日本人がこうした風習をもつ種族と遭遇したという記載もないからである。大森貝塚における「食人の風習」の存在は、貝塚が海岸線から離れた陸上にあること、金属器がなく、骨器・石器が乏しく粗製であることに加えて、貝塚の年代の古さを裏付ける傍証にもなった。

食人説の波紋と人種問題

モースの「食人説」は、報告書だけでなく、海外の科学誌に寄稿した文章でも取り上げられ、国内で開催された講演でも一般聴衆に紹介され、当時の人々に強烈な印象を与えることになった。モースの講演を聴いた白井光太郎は、後年、「日本人

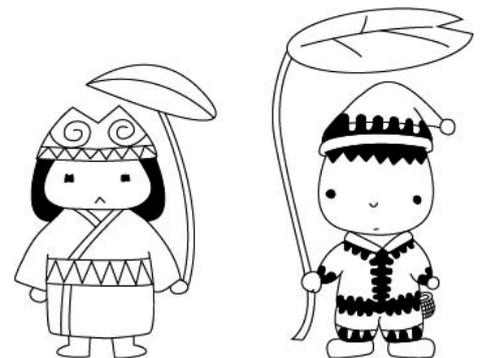
の祖先は人肉を喰いし証ありとの説に驚嘆張目した」と書き残している。貝塚時代における「食人の風習」の存在は、こうして、日本人の起源論、人種問題に大きな波紋を投げかけ、その後の学説に長く影響を与え続けることになる。モース自身の考えは、貝塚を残した人々は先日本人であることは確かであり、また、アイヌでもなく、より古いプレ・アイヌだというものである。なぜならば、日本の歴史記録には食人風習が見られず、また、アイヌにも食人の風習はなく、非常に温和で人を殺す術が知られていないほどだからである。

その後、明治の時代、日本人の起源問題に関しては、東京帝国大学人類学教室の教授となった坪井正五郎が唱えた石器時代人コロボックル説が一世を風靡したことがよく知られている。コロボックルというのは、蔦の葉で家の屋根を覆ったところから、アイヌ語で、蔦の下の人という意味の伝説上の先住民のことであり、石器時代人の仮称として坪井が用いたものである。坪井自身は、モースのプレ・アイヌ説との関連を明言してはいないが、モースの学説が、坪井のコロボックル説に大きな影響を与えたことは間違いない。

坪井は、モースの食人説を認め、コロボックルとは、日本人はもちろんアイヌも恐れ嫌うべき食人の風習を持つ人民であり、その性質は日本人およびアイヌとは大いに異なっていて、人肉の調理法は他の肉類と同様であったと推測する（『コロボックル風俗考』『風俗画報』1895年）。

坪井によるコロボックル像は、このように、その後、児童小説などを通して流布したコロボックルの可愛い小人のイメージとはずいぶん違っている。

かつて『風土記』の時代、茨城県大串貝塚で貝を食べたのは伝説的な巨人だと考えられたが、近代になり、今度は、科学的な研究を通して、大森貝塚を残した人々は、食人をする小人＝コロボックルだという説が主流の学説として登場したのである。アメリカの文化人類学者、ルイス・ヘンリー・モーガンがアメリカ先住民、イロコイ族の研究を踏まえて、『古代社会』を著したのは同時代の1877年のことである。人類の発達段階を「野蛮」「未開」「文明」の3階梯に区分したことで知られる同書においては、とくに先史時代には「凶暴性」「野蛮性」の特徴が与えられた。また、「食人の風習」は「野蛮」の象徴そのものであり、その風習を残しているとされた先住民は、進化の遅れた人種として貶められ、「文明」を有する白人の支配を正当化する根拠とされた（アレンズ著・折島正司訳1982『人喰いの神話—人類学とカニバリズム』）。欧米の文明をいち早く受け入れた明治の近代人は、そうした「食人の風習」を自らの祖先ではなく、先住民の所産だと考えたのである。



コロボックルのイメージ
(左：木下理恵子画、右：北澤志織画)